



研究エッセイ

ESSAY

それは一枚の写真から始まった

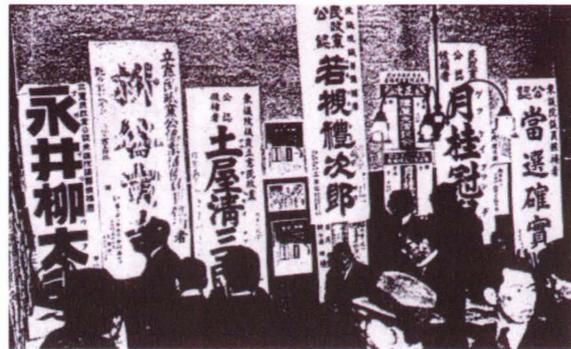
中村 政則 (神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究所・教授)

1 薄命の大正デモクラシー

ここに一枚の写真がある。1928 (昭和3) 年、わが国最初の普選における民政党的立看板である。若槻礼次郎、永井柳太郎などに交じって、「民政党公認候補者 月桂冠児」あるいは「衆議院議員候補者 公認 当選確実」などの立看板もあって面白い。選挙は2月20日に実施されたが、選挙結果をみると若槻礼次郎の名前が無い。ちなみに与党政友会総裁の田中義一の氏名も新聞には載っていなかった。私は驚いて、『衆議院議事録』や両党の党報などを当たってみたが、若槻・田中両党首は貴族院議員であって、じつは衆議院選挙には立候補していなかったのである。とすると、衆議院に席を置く総理大臣はいったい何人いたのであろうか。調べてみると、驚くべきことがわかった。

1885 (明治18) 年に内閣制度が開設されてから (初代総理大臣は伊藤博文)、終戦内閣の鈴木貫太郎首相まで延べ42人の内閣総理大臣がいるが、そのうち選挙の洗礼を経て、衆議院に議席をもつ総理大臣は、次のわずか三名にすぎなかったのである。すなわち、「平民宰相」の原敬 (岩手県)、民政党的の浜口雄幸 (高知県)、政友会の犬養毅 (岡山県) の三人だけである。勿論この事実は定評ある日本政治史の研究書にも書かれていない。私は心配になって、友人の政治史の専門家に電話して尋ねてみたが「えっ」というだけであった。数ヵ月後、作家の城山三郎氏と対談する機会があったので、そのことを話すと「そんな大事なことを何故書かないのですか」といわれた。後日、その対談を読んだ磯田光一氏が『戦後史の空間』(新潮社、1983年)で、この事実を早速引用していた。それ以来ほぼ20年以上が経過したが、私の「発見」に異を唱えた研究者は一人もいない。

わが国の政党政治は1932年の5・15事件で止めを刺され、1936の2・26事件をさかいに軍部独裁へ向かうが、実は大正デモクラシー期において日本の議院内閣制は実質的に機能していなかったのである。大正デモクラシーがなぜ「薄命のデモクラシー」に終わったかを解くこと



は、近代政治史の難問の一つであるが、はからずも私は一枚の写真から、戦前における「制度としての民主主義」の度合いは、予想外に底の浅いものであることを知った。

2 非文字資料と文字資料

私の専門は経済史であり、非文字資料から最も遠いところで研究してきたような気がする。しかし、30年ほど前から、私は文献中心の歴史学では限界があり、時代と人間を描くにはオーラルヒストリーや絵画、写真などの非文字資料を活用すべきであると考えていた。拙著『労働者と農民』(1976年)の冒頭に農作業でひび割れた「21歳の嫁の手」を掲げたが、あの写真が読者に与えた衝撃の大きさは、私にも驚きであった。また山本作兵衛の『筑豊炭鉱絵巻』も炭鉱夫の労働と生活の実態をビビッドに描く上で不可欠であった。その意味で、私は歴史学ももっと図像、絵巻、伝承、聞き書きなどを多用すべきであると思っている。しかし、非文字資料はそれ自体ではものを言わない。そのことは文字資料も同じであって、調べる側が能動的に働きかけたときのみ、ものを言い出すのである。したがって、非文字資料を読み解くためには、文字資料に補完されなければならないし、逆もまた真である。最近では、日本中世史、近世史でも絵巻物などの図像を解説、解析した研究が盛んである。私も我々のプロジェクトがCOEに採択されたのを機会に非文字資料と文字資料の関係を深く考えてみたいと思っている。